

講
演

(本紀要所載論文は凡て署名者の責任に
して本會の意見を代表するものに非ず)

日本精神と美術

東京帝國大學教授
文學博士

藤 懸 靜 也

茲に私は日本精神と美術といふ標題を撰んだ。それは、現在日本精神が盛に論ぜられ、種々の方面から觀察せられてゐるが、専ら美術品の上から觀ると、其處に日本精神の動きの特性が、如何に認められるかについて、聊か私見を述べて見ようと思ふのである。

云ふまでもなく美術は一國文化の事であつて、それは國民性情の中から咲き出たものであるから、従つて美術品の上には、自づから國民主義的系統の文化變遷が著しく現れてゐる。それで現に残つてゐる美術品を見る事によつて、其れが製作された時代の文化を知り、假令斷片的にでも文獻の足らぬ處を補

ふ材料にすることが出来る。何せよ美術品は時代の製作物として、此の時代精神を映出したものであるから、歴史材料としては第一根本的なものであつて、恰も公文書によつて歴史的事實の真相を考察するやうに、美術品を根本材料として、時代の文化を考へ、國民性の時代的な顯現を考へ、時代精神の流れを洞察することが出来るのである。故に美術品を研究することに依つて、日本精神の研究に資することが少くないと思ふ。

そこで、日本精神が一般の注意を強く喚起するのは如何なる時であるかを考へて見ると、元來日本思想又は日本精神といふ言葉は外國思想・外國精神と對立的な言葉である。従つてそれが盛に強調論議せられるのは（一）我が日本が外國文化の影響を烈しく受けつつある時、（二）外國文化と日本文化が對立してゐる時、（三）日本文化が遂に外國文化を克服せんとする勢を示して、外國文化の影響は甚だ少く日本文化の勃興が目立つて見える時である。故に日本精神が十分に發現されて、外國思想の影響が及ばなくなると、日本精神は特に問題視されないで、平靜に置かれる。そこで右に述べた（一）（二）（三）は互に關係的であつて、歴史上我が國で外國文化を盛に取入れ、それが我が日本文化に烈しい影響を與へ始めると、必ず其處に日本文化と外國文化との對立が起つて、次には外國文化克服の努力が生じて來てゐる。

斯の如く、我が國が進んで外國文化を取入れて、之を我が日本文化との對立に置く動機は何にあるかといふと、其の最も大きな動因は、對外關係の上に於て我が國が非常時に際會した時、出来るだけ早く彼我對立同等の文化的位置に立たうとする努力から生れて來てゐる。さういふ對外關係で我が國が外國文化を取入れた例は近く明治維新當時にも見られるが、必ずしもそれは現代又は近代のみの事でなく、我が日本はアジア大陸の東に横たはつてゐて、東西兩方面から外國文化の影響を受け易い位置にあるから、遠く遡つて有史以前の昔から今日に至るまで、繰返し繰返し同じやうな對外關係に立つて、外國文化を受取つては、日本化しつつ、遂に之を自分のものとして役立て、國家を發達させて來たのである。就中其の動きの最も著しく見えるのは神功皇后の三韓御綏撫以來であつて、我が日本は武力に於てこそ隣近諸國に其の威を振うたが、文化方面に於ては初め彼の方が優つてゐた。それで我が國が大陸に踏み込んで、大陸諸國と對立しつゝ、其の經營の歩を進める爲には、彼の文化を速に吸收消化して自分のものとし、文化に於ても彼を制し彼を率ゐる程度に達する必要があつた。神功皇后の御時以後、頗る急速に又甚だ盛に支那大陸の文化が取入れられたのは之が爲であつて、茲に儒教・佛教が傳はり、日本思想の上に大變革を生じ、なほ物質文化の上にも驚くべき發展を來したのである。乃ちそれが聖徳太子の時代に最も多く其の花を開いてゐるが、其の時代の文化は、韓半島を經由して來た六朝文化であつて、今も

法隆寺に残つてゐる當時の建築、其の内陣の釋迦像、彌陀像、勢至像、或は玉蟲厨子などを見ると、外國文化が如何に取入れられ、又、如何に消化されたかの經過が明かに認められる。一度でも法隆寺に行つた事のある人は、千三百年の昔に、これ程までに燦然たる文化が日本にあつた事を驚嘆するであらうが、若しも其れ等の美術品が現存しなかつたならば、文獻のみで想像する事は到底困難であらう。それ程に法隆寺といふものがあるので、聖徳太子時代の文化を今日明かに知ることが出来るのである。併しこゝに注意を要するのは、韓半島經由の六朝文化を我が國が單に其の儘で摸倣したのではなく、之を十分に日本化即ち自國化して自分のものにするといふ努力が、それ等の藝術品の上に現れてゐることであつて、其處に兩國文化が融合されて現されてゐるといふ處に、意義が存するのである。其の後も我が國は度々外國文化の影響を受けてゐるが、其の度毎にいつも進んで外國文化を日本化してゐる。先づ次の寧樂時代を見ると、大化以來實に急速な進歩を示してゐる。これは云ふまでもなく唐文化が入つて刺激した爲であるが、其處には朝鮮半島に於ける對外關係變遷の影響が著明に認められる。聖徳太子頃までの支那は隋の代であつて、其の勢力はまだ半島に伸びず、半島では我が國が百濟を助け、高麗新羅の勢力が相平均してゐた時代である。ところが隋の後に唐といふ漢人種の強盛な國が起り、其の勢力は印度を壓し、滿洲・朝鮮に伸びて高麗新羅にまで及んだので、こゝに形勢の大變化を起し、今まで我が國が

百濟を助けて朝鮮半島で經營してゐた關係は、一變して唐對日本の關係になつた。さういふわけで唐が徐々に其の力を半島に伸ばして來たから、我が國でも力を盡して舊勢圏の恢復を圖つたが、遺憾ながら力及ばずして次第に衰へて來た。そこで我が國として進んで唐の勢力と對立する爲には、彼を凌ぐだけの優秀なる新日本文化を樹立せねばならぬ事となつたが、其の時恰も、我が國では、其の弊に着眼した先覺者があつて、大改革を施し、進んで唐文化を取入れた。それが又、我が國獨特の文化の花を次代に開く基となつたのである。

歴史を見ると、大化以後、天智天皇の御代にならうとする頃に、朝鮮半島に於ける我が國の勢力は甚だしく縮減せられ、今まで我が國の助力の蔭に生きて居た百濟も滅亡し、之を恢復せんとした努力も水泡に歸して、我が國は遂に半島から手を引く外ない事となつてゐるが、此の時或は唐の兵力が勢ひに乗つて我が國を侵して來はせぬかといふ虞があつたので、九州地方では急に水城を築き、又、防人を置いて、海防につとめた。それ故唐は遂に我が邊境に一指を染めることも爲し得なかつたが、何としても世は非常時である、なほ寸時の油斷も出來ない。そこで我が文化を唐の文化と對立する優秀なものとする爲に、非常な勢ひで彼の文化の攝取に力を注いだ。即ち此の時も只唐の文化が優れてゐるから之を摸倣するといふのではなく、對外關係上の必要に迫られて、我が文化を一層優れたものとする爲に急速に取

入れたのであつて、其處に強い意氣込があつた。斯くして遂に、寧樂時代の立派な文化が我が日本に生れたのである。

寧樂時代に入つても、なほ引續いて唐文化は我が國に取り入れられてゐるが、其の結果我が國の文化は、實に長足の進歩を來したのであつて、國力も大に充實し、彼に引けを取らなくなつたといふよりも、寧ろ老大唐は下り坂であつたのに對して、我が日本は新興の勢ひ隆々たるものがあつた。萬葉集を見ると、「百磯城之大宮人者暇有也」などあつて、如何にも悠揚たる時代を思はせるが、それは我が國の實勢力が既に唐の勢力に勝つてゐた事を語るものである。聖武天皇が東大寺の大佛を造りになつたのも、日本・唐・天竺の三國に互つて世界一の大佛を造らんとする思召で、遂に御成功あそばされたものである。而も大佛だけでなく、それを納める大佛殿までも建てになつた。現存の大佛殿も驚くばかり大きなものであるが、最初の大佛殿は今よりも更に大きかつたのであつて、今日までには二回焼失したのである。これ程までに我が國寧樂時代の文化は優秀を極めたものであるが、それは唐文化を採入れ、更に之を日本化して築き上げたものであることを、我々は考へに入れて置く必要があらう。

二

ところが寧樂時代を終つて、次の平安・鎌倉時代に入ると、今まで盛に受入れた唐の文化をすつかり

消化しきつて、之を純然たる日本文化に立て直して了つてゐる。即ち其の時までに 外國文化を受入れるだけ受入れ、吸取れるだけ吸取つて、之を基本に自己獨特の文化を建てたのである。菅原道真が建言して遣唐使を廢したのは、最早唐が我に供給すべき一物をも持たぬことを現したものであつて、斯くして茲に生み出された文化は純然たる日本文化である。文學上で見ても、源氏物語・枕草子、其の他多くの文學的作品が出てゐるが、更に繪畫方面に就いて見ても、平安時代並に鎌倉時代には、繪卷物としても實に優れたものを残してゐる。即ち是等の點のみから見ても、此の二時代は我が日本文化が、第一段の大成を見た時代であつて、或る意味に於ての文藝復興時代とも云へるであらう。

此の平安時代末期から鎌倉時代にかけては、支那では宋の世代であつたが、其の文化は殆ど日本に入つて來なかつた。それは宋の文化が微力であつて、我が日本人にそれ程深い印象を與へなかつたからであるとも云へるが、一つには當時の我が日本文化が十分の發達を遂げて彼を凌ぐものがあつたら入り得なかつたのであるとも云へるであらう。宋の次は元であるが、此の元は鎌倉時代に我が國に押寄せて來て、所謂元寇の役を現出した。この元軍襲來事件は我が國の對外關係に大きな一時期を畫するものであつて、當時我が日本は元軍を撃退して、其後に元は盛に禪僧を我が日本に送りつけた。これは我が國情を探らせる爲であつたといふが、それ等の禪僧たちは甚だ認識不足であつたので、元では之を責めて色

々取調を行つてゐる。無論斯の様な事をしたのは、再び日本を襲はんとする爲の計畫であつたと思はれるが、我が國の邊防が十分である事を知つたのか遂に再來しなかつた。併し其の時の對外關係が原因となつて、鎌倉後期から室町時代にかけては又、支那文化を多量に採入れてゐる。そして其の時に宋元文化が盛に流れ込んで來てゐる。宋の盛時には宋文化が入らなかつたが、元代に元を通じて前代の宋文化が入つて來たのである。これは支那との對立關係から來てゐるのであつて、即ち元代に至つて我が國が支那に關心を持つに至つたからである。

宋元文化が入つた事例は、繪畫の上にもよく現れてゐる。即ち其れは禪が我が國に入つて來た事と關聯して、水墨畫が我が藝術界に入り、明兆・正信・元信などが出て、宋元系の畫が繪畫界に勝を制し、其の前に勢ひを占めてゐた大和畫系が衰へる結果を見てゐるのである。ところが、それ程までに一時我が藝術界を席捲してゐた宋元文化が、室町時代末期から戰國時代に至ると、俄然として一變した。これは甚だ注意すべき現象である。

此の時代は下が上に尅つ所謂下尅上の世であるが、これは老大國支那などが萎靡して、内亂が起つたのとは形勢を異にして、近世初期の日本は非常な勃興期である。其の日本の勃興氣運が強烈であるために、それが止むに止まれぬ勢ひとなつて、遂に戰亂にまで展開したのである。従つて其の名は彼我同じ

く戦國時代であつても、支那などの戦國時代とは性質が違ふのである。殊に我が國の戦國時代の特色は、それが日本精神に目覺めた勃興時代、日本人的な新興時代を意味する事であつて、其處には顯著なる復古精神が見えるのである。其の時までの文化は、支那系統の文化であり、藝術も亦支那的趣味のものであつたが、新興の人々は皆生れながらの日本人として、純粹な日本精神の中のみ育つて來た人々である。だからさういふ人々には支那趣味は不向であつて、之を満足させるのは只日本趣味あるのみである。そこで新興の藝術家たちは多く支那系統の藝術を棄てて、平安時代、鎌倉時代の日本藝術を復活した。即ち安土桃山時代から江戸時代初期までのものは、主として鎌倉時代の復活であつて、文學・繪畫等の上に文藝復興時代を現出したのである。これは明かに日本精神の復興を意味するものであつて、この復興精神が江戸時代を通じて進展し、而も外國文化の刺戟を受けなかつたから、平安時代と同じく、純日本的な發展を遂げた。そして其處に獨特な日本文化を築き上げた。然るに江戸時代の末期に至ると、新に露西亞、英吉利、亞墨利加文化の侵襲を受ける事になつて、茲に大なる變革が起つた。即ちこれ又、對外關係の爲に日本文化が變革を受けるに至つた實例と見るべきものであらう。

そこで次の明治時代には、歐米の勢力と對抗する爲に出來るだけ早く其れ等の國の文化を取つて、日本を新しく強め上げる事の必要が生じた。これは恰も奈良時代初期に唐文化を急に取入れて、唐の勢力

と對立を圖り、それが次代日本文化の花を開いたやうに、茲に急速に歐米文化を取入れて、我々の現代文化が作り上げられたのである。

三

以上に述べた如く、美術品の上から觀ると、日本美術は外國の藝術を受入れては日本化し、又日本化して、進歩發達して來たのであつて、更に全日本文化の上に互つて考へると、それは、有史以前から同様の過程を反復して來た事が知られるのである。

外國の藝術が日本に盛に影響して來ると、一時は外國主義謳歌の如き姿を呈するが、それが十分に攝取せられると、其處に日本精神、國民性に適應せぬものに對して反省が起り、一たび此の反省が起つて來ると、新に藝術對象を研究検討して、之によつて行き詰つた時代を新しく展開するのである。其の時に先づ何が検討對象となるかと云ふと、それは我が日本國土の自然であつて、此の日本國土の持つ特質が新藝術への展開を與へるのである。要するに時代の藝術が其の手法の上に於て典型的に陥り、行詰りが感ぜられた時、又、内容上からも日本の趣味に合致しないで、行き詰つた時には、藝術は寫實に歸るのである。これは個人としても、又、大きく一般藝術界についても云へる事であつて、藝術の新展開を圖るには、いつも必ず元へ歸つて見直す、換言すれば即ち、寫實に還る、そのときに對象になるものを

見直して行く。ところが其の際に若しも外國の影響を多分に受け入れてゐて、其處に食ひ違ひを生ずると、國土の自然が大きな衝動を與へる。國土が藝術意識の上に強く働きかける。此の國土の刺戟が自己反省を喚び起して、其處に藝術の新展開が展開するのである。元來藝術と云ふものは自然の影響を受け、事之最も大きいものであるが、殊に日本の藝術は自然を尊ぶ。之に對して外國の藝術は人事を重んずる。故に外國の藝術から人事を取去れば零に成り、日本の藝術から自然を除去すれば、あはれなものとなる。斯様に日本の藝術は自然を尊ぶものであるから、それは日本の國土に負ふ所極めて大なるものがある。即ち日本の國土が日本藝術を培うてゐるのである。此の國土と藝術との關係は、他の國についても言へる事であつて、藝術は國民性によつて發達の趣を異にするが、而も其の國民性は國土の如何によつて異なる事を見るならば、國土と藝術とが密接不離の關係にある事が知られるであらう。故に外國文化が入つて來て、外國藝術が盛に歡び迎へられる時期があつても、やがて反省の時期が來ると、國土の檢討が始まつて、國民性が藝術を本來の日本主義に還らせるのである。前に述べた關係から、斯ういふ事は何處の國にも起る事であらうが、特に我が日本は、國土の刺戟を強く感じて、國民性と藝術とが緊密な關係を持つ國であると思ふ。故に外國文化が入つて、其處に外國的な藝術が勢ひを占める事があつても、それはいつも外國藝術と同じものではない。例へば油畫が入つても、それは純然たる西洋畫では

ない。油で畫くといふ事は世界的であるが、その技術によつて表現せられる畫は、常に或る國の畫である。佛蘭西なら佛蘭西の畫である。故に日本の油畫は日本畫である。これは各國の畫と比べて見れば直ぐに分る事である。日本の國土が西洋から來た油畫を日本化して了ふのである。故に外國の藝術が日本に入つて來ても、それは或る期間の經過後には、必ず日本藝術と變化するのである。私は今現代社會の事に就いて云つたが、過去時代に於ても同じ過程が取られた事は、既に述べた所である。斯の如く各時代の日本藝術、日本文化の上に常に一貫して日本主義が現れてゐるのは、其處に日本的自覺が大きな働きをしてゐる爲であると思はれる。

四

日本人の國土愛の精神が、絶えず其の藝術・文化の進展の上に働いて、それを特性づけて行つてゐる事は前述の如くであるが、其處に又、祖先崇拜が非常に強化されて現されてゐる。これは外國に見られぬ所である。そして其の祖先崇拜が強くなると、皇室の尊嚴は彌々高まり、總てが皇室を中心に仰いで歸一する動向を強める。斯かる精神が美術の上にも現れてゐるかどうかと云ふと、その現れは殊に最も顯著に見られるのである。他の何よりも明かな事實は伊勢の大神の宮居に拜せられる。畏くも伊勢皇大神宮に對し奉る日本國民の超絶的な崇敬は、全過去を通じて不變であると共に、現存に於ても不動であ

り、將來も亦永遠に然るべきである。此の皇大神宮に對し奉る崇敬の念の不變不動であることは、日本國土を愛する日本人の國民思想の淵源をなすものと信ぜられるが、其の伊勢皇大神宮の御宮居は、式年として毎二十年に新規造營する事に古來定まつてゐる。そして其れは、祝詞にも「底ッ磐根ニ宮柱太シキ立テ」とある通り、地下深く柱を掘り立てる昔ながらの建築構造を其のまゝ現地に傳へてゐるのである。即ち土臺石を入れずに磐石の層まで深く地を掘り穿ち、宮柱を堅固に立て、又、「高天原ニ千木高知リ」と祝詞に云はれてゐるやうに、屋上にはこれ又昔ながらに千木・鏝木を上げるのである。これは所謂掘立柱式であるから、建築法式から云ふと原始的なもので、唯一神明造と呼ばれるものであるが、此の昔ながらの建築を、現代にまで持ち傳へてゐるといふ事は、何とも云ふに云はれぬ日本の特色であつて、これ程ハッキリと日本精神を現してゐるものはないと思ふ。若しも此の皇大神宮の建築を以て、單に、原始様式を不思議に現代に残した意味に於て世界建築史上の一標本であると云ふやうな見方をするものがあるならば、それは形の上ばかりを見るもので、日本精神の没却である。他の多くの神社建築を見ると、殆ど其の大部分のものは、佛寺建築の影響を受けて、大陸式化されて了つてゐる。其中にあつて獨り伊勢の皇大神宮のみが、儼然として昔ながらの純日本式建築を保つてゐるといふのは普通でない。即ちそれは大神に親しく仕へ奉る伊勢の神民を始め、崇敬心に篤い日本人が非常な努力を以

て、今日に持ち傳へて來た結果であることが知られるのである。古來佛教側の爲し來つた所を見ると、大きな神社の在る附近には必ず寺を建てゝゐるが、その中には神社の神領を奪はんとする腹黒い目的を抱く者が少からずあつて、其の爲に神社と寺との間で争を起し、遂には寺院側が勢力を得て神領を取つて了つてゐる例を多く見受ける。伊勢でもさうした争ひが度々起つてゐるが、而も伊勢では、熱烈なる大神宮崇敬の至心から飽くまでも戦ひ貫いて、太古以來の神宮の建築様式を今日にまで持ち傳へたのである。即ちこれは、外國文化の影響に對して美術の上に於ける日本精神顯現の最も代表的な例であると云つてよからう。

五

斯の如く日本文化が外國文化の影響を受けては之を消化吸収して日本化してゆく其の變遷の間に、日本精神の顯現が見られるのであるが、其の日本精神の現れには、時によつて強弱がある。それは外國思想の影響を強く受けた時、外國思想と日本思想とが對立した時、日本思想が外國思想を克服して外來影響が少くなつた時によつて、それぞれ現れを異にするが、現時のやうに外國と事を構へてゐる時には、日本精神が諸方面に活潑に働き、其の結果が藝術の上にも及ぶやうになつて來てゐると思ふ。併し現下の事變がなくとも、此の昭和の聖代には、藝術の方面に日本精神が現れて、燦爛たる光を放つべき時期

であると考へる。即ちこれまでの油畫は西洋畫であつて當代の日本畫ではなかつたのであるが、それが現代に於ては畫界を代表する立派な盛觀を呈するに至つてゐる。尤も現在ではまだ一般に其の大きな價値が認識せられてゐないかも知れないが、今後五十年百年を經過した後に見たならば、現に考へられるよりも以上の燦然たる光を放つてゐることが認められるに違ひないと思ふ。要するに過去を顧みて、我が國の藝術の優れた時を考へると、それは外國の物が日本人の力で日本化された時であつて、其處に獨特なものを作り出され、それが立派な作物として後世に光を放つてゐるのである。其の事は現代のもの、江戸時代のもの、或は平安鎌倉時代の作品にも通じて云へる事であつて、江戸時代では慶長あたりもの、平安鎌倉時代では大和畫などが、何れも特殊の優れた藝術として、幾多の作品を今に残し傳へてゐるのである。

そこで今茲に我々が現代文化を考へる時、最も喜ばしく感ぜられるのは、日本文化が世界を輝かす氣運に面してゐる事である。如何に過去の文化が立派でも、それは未だ嘗て對立諸國に大影響を與へた事はなかつたが、將來は我が日本の國民文化を以て世界に一大貢獻を爲すべき時期である。此の氣運に至つたのは、誠に慶賀すべき事であつて、今や我が文化の光は、隣近の滿洲・支那に輝きつゝあるが、やがては歐米諸國も其光を仰ぐ事となるであらう。これは獨り美術の上のみでなく、凡ての文化皆然りて

あつて、日本文化が世界を化する曉が豫期されるのである、それは恰も希臘文化が世界を支配したやうに、日本文化が偉大なる光を世界に放つ時である。今日我國では全國民が全力を擧げて日本文化の發揚に努めてゐるが、將來日本藝術の大なる價值を世界に正しく知らせる事も、日本文化を世界に輝かす一方法、日本精神を世界に發揮する一方便であらう。斯かる希望は、過去に於ては一種の空想とのみ考へられたが、現在の日本としては、近い將來に於て實現し得る事である。

明治天皇陛下の御聖徳が積つて、日本の文化が將來の世界に照り輝くといふ事は、我が將兵諸君の忠勇の譽が世界に輝くのと同じく、嚴然たる事實たるべきである。そして我々はそれを現實にする大使命の下に協同して進みつゝあるのであつて、我々が此の生甲斐ある幸福な時代に生を享けた事は感謝に堪へない事であると云はねばならぬ。

折にふれて

二宮 守人

おほきみのみいつのまゝにのりの道

さかゆく末のたのもしきかな